

7月20日 於神戸市勤労会館

さっそく始めます。よろしくお願ひ致します。

今日は午前中、神戸の「人と未来防災センター」を見学させていただきました。その後に、東遊園地で「希望の灯」を見てきました。実は、震災後に岩手の被災地に神戸市からこの「希望の灯」をいただきました。岩手支部で「灯はともし続ける」という震災の記録集を作成しましたが、この中に神戸市から岩手の被災地の陸前高田市にいただいた「希望の灯」の写真があります。また記録集のタイトル「灯はともし続ける」も、この「灯」から付けたものです。きょう神戸市の「希望の灯」を実際に見ることができて良かったです。写真に撮らせていただきましたので、後で岩手支部に報告したいと思います。

それから「人と未来防災センター」は、充実した施設ですね。施設に入って最初に地震が起きた時の再現映像を見ましたが、これはショッキングで見ていてドキドキしました。震災を経験した人が見たら、つらいんじゃないかな・・・と思いました。私が、今日ここに来たのは神戸に学ぶという意味もあり、きょう神戸市の施設を見学し、とてもよい勉強になりました。あのような施設を何年か後に岩手県でも建てられるといいなあと思つづく思いました。

では、まず自己紹介をします。自分の中では、6つの道を行ったり来たりしています。

まず1つ目、手話サークルの活動です。学生時代に手話サークルで聴覚障害者と手話に出会いました。

次に2つ目の道ですが。サークルのろう者からろう学校の話を知りました。ろう学校では手話が禁止されていたと聞いて、私は考えが浅いので単純に「ろう学校の先生になろう。そこでろう者や手話と関わればいいんじゃないか」と思つたんです。つまり、2つ目はろう学校の教員としての道です。

3つ目の道。1997年（平成9年）に全通研岩手集会有って、その少し前に全通研の岩手支部に入りました。全通研岩手支部の活動が3つ目の道です。昨日聞いたら、岩手集会有に参加したという人がいて、兵庫の支部長さんでした。16～7年くらい前の話ですが。嬉しかったです。

4つ目の道は、その岩手集会有の時に、集会有担当の運営委員になって初めて本部の仕事をする事になり、これが全通研本部との関わりです。4つ目の道は、全通研の本部の役員としての道です。

5つ目は、パソコン要約筆記の活動です。1999年にアメリカ、2000年にはスウェーデンにろう学校の生徒の引率で行く機会がありました。アメリカもスウェーデンも、ろう学校では手話による教育が進んでいたのですが、文字保障もちゃんとやってるんです。日本のろう教育でも文字保障が必要と考え、パソコン要約筆記の活動を始めました。

この1～5の道を行ったり来たりしています。全部一生懸命やっているわけではないですよ。ある時はこれを、ある時はこっちをという感じで、その時々で比重は変わります。

6つ目としては、5つの活動を支えてくれている家族。妻や子どもたちです。特に家族の中で一番支えになっているのは、シロという犬です（笑）。シロは私がどんなに遅く帰っても、酔っぱらって帰っても、シッポを振って迎えてくれます（笑）。いろんな活動ができるのも家族の理解と支えがあつてのことです。

ところで、私がろう学校の教員になった頃は「手話サークル」とか「全通研」というと、ろう学

校の先生方はあまりいい顔をしなかったです。平成になって文科省（当時の文部省）が手話を認めたわけですね。なぜ認めたかという、その理由の一つが「手話が市民権を得たから」ということでした。つまり、手話が市民に広がったということです。ろう学校で手話を使わない大きな理由の一つが「手話を勉強しても、社会に出たら手話を知っている人がいない、だから口話で発音を身につけた方がいい」みたいな考えがありました。でも、この10、20年の中で、手話がどんどん広がって、テレビでも手話通訳が普通に見られるようになりました。昔は、修学旅行に行って手話で話をしていると「あれ何？」という目で見られました。今は手話で話していると女子高生から「かっこいい～、手話だ～」って注目されたりしますから。時代は変わってきました。

私は昔、手話サークルの活動とか、全通研の活動で「手話を広めるんだ！」と言っても、正直それは限界があると思っていました。でも、みなさんの活動の着実な歩みがあって、教育に手話を導入する結果を導いた。これは本当に大きいことだと今、実感しています。

時間が足りなくなるので、進みます。まず、岩手県について。どこにあるか。みんな、イメージとしてなんとなく北の方というぐらいだと思いますけども、岩手県は本当に山・森と海という感じ。岩手県は、土地のほとんどが山です。それから、NHKの「あまちゃん」。これ、見た人います？ありがとうございます。まさにこの舞台が久慈市というところで、私が震災の時に住んでいた場所です。このドラマは本当に岩手の人たちを元気づけました。主演していた能年さん、兵庫県出身の方ですね。だから、縁があるなと思いました。（会場から「かわいい」という手話が出る）そう、かわいい女性です。かわいくて、ちょっと抜けてるんですよね（笑）。そこがまたいい。

そして、岩手は明治、昭和と大きな津波を経験しています。岩手の場所ですけど、隣が秋田、北が青森、南に宮城。真ん中に高速道路、だいたい同じ場所を新幹線が通っています。高速道路に沿って大きな町があります。東側は山です。海の方にも小さな町が並んでいます。盛岡市が私の実家で県庁所在地です。盛岡から沿岸の海に行くには2時間はかかります。ちょっと遠い海辺の町だと3時間かかります。私は盛岡で育ちましたが、小さいころ夏に海に行くといったら家族の大イベント。朝、3時に起きて、お弁当作ったり準備をして、電車がないから車で行くんです。こんな峠を走って、やっと海に近づき「うわ～、海が見えた！」と喜ぶ。年に1回でも海に行く機会があれば本当に楽しかったです。

東日本大震災では、沿岸の海の近くはものすごい被害を受けたのですが、内陸の方は、ほとんど被害がなかったんです。ですから震災後は、岩手県の内陸から沿岸に支援に行くという図式ははつきりしていました。岩手の写真です（スライド）。まず道路は、山・山・山。どこを走ってもこんな感じです。海へ行くとこんな感じ（スライド）。リアス式海岸です。この地形は津波に影響があります。入り組んでいるので、狭いところや波の進む方向によって津波がものすごく高くなるので、予測が難しいです。この地形が被害にも影響しました。それから海辺の道路には看板（スライド）が出てきます。（「これより先、津波浸水想定区域」とある）つまり、海の町を車で走っていて低い場所に、この看板があるんです。ここから先、津波が来たら危ない場所ですよという意味です。そういうふうに考えると、危ない場所だから、家とか建ってないのかなと思うんですけど、ところが、家がいっぱい建ってるんです。やっぱり、低い土地の方が便利だからでしょうね。

さっき、岩手県で過去に大きな津波を2回経験してるという話をしました。明治の時は、2万人ぐらいの方が亡くなってる。昭和の時は3千人ぐらい。いずれも亡くなられたのは岩手県の人が90%以上でした。だから、岩手という津波の歴史なんです。なのに、やっぱり、年月が過ぎると

その被害が大きかったことを忘れてしまうんですね。特に、明治の震災は被害が大きかったです。さきほど神戸の防災センターへ行ったと言いましたが、阪神淡路大震災は直下型の地震でした。突然ダーッと揺れが来て、家がつぶれて、どうすることもできない、逃げることもできない。それに対して岩手の津波の被害は、地震が起きたあと30分とか、40分してから津波が来たわけです。だから、逃げればよいのですが…。明治の三陸津波の時は、沿岸地域の震度は2でした。震度2といえば、よくある地震で、誰一人逃げる人がいなかった。ところが津波は、ここに書いてありますが、とんでもなく高い津波が来たんです。明治時代ですから、当然、気象予報も遅れてますから、大変な被害でした。昭和にまた大きな津波があったんですけど、これは夜中2時頃だったんです。

岩手には、こういう言葉が残っています。「津波てんでこ」。「てんでこ」の意味は「一人ひとりがそれぞれに」、つまり、一人ひとりが自分で行動しなさいという意味です。要するに、一緒に逃げようって言ってたらダメ、まず自分が逃げろと。自分だけでいいからとにかく逃げなさいという意味です。家族を探しに行くとか、誰かを助けようとか言ってたらダメだ。自分の命、これをまず最初に大事にしなさい！逃げなさい！そういう言い伝えがあるんです。「津波てんでこ」これは、海の近くの人なら、特に年配の人ならみんな知っている言葉です。そして、いろいろな場所に石碑が建っています。(スライド)ここに書いてあるのは「高い場所の家は安全で、子孫の平和が続く。忘れるな。明治の時は生き残ったのは、2人だけ。昭和の時は、4人だけ。あとはみんな死んだ。だから、ここから先に家を建てるな」と。そういう石碑が岩手県の沿岸のいろんな所に残っています。このスライドの石碑があるのは、宮古市の姉吉という所なんですけど、この人たちはその言い伝えを守って、この石碑より下に家を建てなかったんです。だから、今回の震災でこの姉吉の人たちはほとんど無事でした。被害はほとんどなかったんです。だけど、このような言い伝えがすべての地域で守られているわけではなく、石碑があっても、石碑がもう転がっていたり、家が建っていたり。やっぱり、便利なところで生活してしまうわけです。

3月11日、その日のことを話します。14時46分地震発生。先ほども言いましたように、私は久慈市というところの支援学校にいました。3月11日というのは金曜日でした。私のいた支援学校には寄宿舎があり、金曜日は帰省日。子どもたちが帰る日です。久慈というところは、岩手県の北の端っこにあって、しかも田舎。かなり遠くから来ている子どもたちもいて、お昼過ぎには帰る子どももいます。ですので、この時間帯というのは、非常に微妙な時間帯で、しかも次の週が卒業式の予定でした。だから、この日は最後の思い出作りに校外学習で町に出かけている学年がたくさんありました。

当時、私は単身赴任で一人で久慈市の官舎に住んでいました。家族は内陸の盛岡市にいました。子ども二人は高校生で、春休みに入っていました。長女だけは、就職していて福島にいました。あとから、原発のことを知った時に非常に心配でした。地震と同時に東北全域が電気・水道・ガス・電話がストップし、それにガソリンスタンドも閉鎖。そして、福島原発事故が発生したわけです。

阪神淡路大震災の時は朝でしたね。朝起きてテレビを見て、驚いたのを覚えています。神戸が燃えている状況がテレビに映し出されて、ショックを受けました。当然神戸の人たちは、この状況を見るができなかったと思います。それと同じように、東日本大震災でも地震発生と同時に電気がストップしたので、テレビを見ることはできなかった。どういう状況か、被災地の私たちはわからなかったんです。

そこで、聞こえる人間は、ラジオですね。「ラジオ持って来い。」ということになりました。とこ

ろがラジオって、今その辺にないです。ラジオ探して、でっかいラジカセみたいなものを物置から見つけてきて、慌ててるから職員はコンセントに差してました。「鳴らねえ」と。電気来てないことに気づいて、今度は電池を探すわけです。電池見つけて、ようやくラジオをつけると、どんどん悲惨な状況が流れてきました。

もう一回おさらいしますけど、(スライド) ここが震源地だったんです。今回の地震ではちょうどプレートに沿って震源が広がっていったんです。岩手県、宮城県、福島県、この3県が大きい被害を受けました。(スライド) ここが盛岡で、仙台、福島、ここが福島原発。私がいたのはここ(久慈市をさす)です。

津波が来るまでの時間、平均すると30~40分くらい。久慈市は岩手県でも北のはしっこにあり、被害はわりと少なかったです。久慈市の震度は5くらい。震度5っていったら、たまに経験する震度だったので、そんなに大変だと思わなかったです。ただ揺れが6分くらいずっと続いたんです。いつまでも揺れがとまらない。さっき言ったように直後に停電したので、携帯で調べたんです。そしたら津波警報が出てました。ただ、この津波警報というのが、後でいろいろ問題になったんですが、宮城県で6m、岩手県は3mの警報でした。この6m、3mというのは、防潮堤で防げる高さです。「大丈夫、津波が来てもはね返す。」と多くの人たちは思ったんですね。実際はその何倍もの津波が来ました。

私がいた学校は高い場所にあったので安全でした。学校にいる生徒はまず安全確保して、「大丈夫、校内の生徒は大丈夫」。ところが、さっき言ったように、校外学習に出かけた子どもが、たくさんいたわけです。そこと連絡がとれない、電話も通じなくなりました。それから北リアス線といって「あまちゃん」にもでてきた路線で、ちょうど帰る途中の生徒が二人乗っていたんですね。ここも連絡がとれない。携帯電話は通じないんですけど、メールはかろうじて通じたんです。けどやっぱり電波の状況が悪くて、すぐに返事がこない。だから生徒がどうなっているかという状況がつかめないんです。とりあえず学校にいる生徒、帰宅できない子どもたちとか、あるいは迎えに来た保護者とか、みんな学校に集めました。うちのろう学校は、寄宿舎があったので、寄宿舎の食堂にみんな集めて、3月でまだ寒い時期でしたけど、うちの学校には石油ストーブが何台もあり、石油ストーブで暖をとりながら子どもたちと過ごしていたわけです。

ようやく18時過ぎ頃に校外学習に出っていた職員から、生徒は全員保護者に引き渡し、教職員だけ地域の集会所に一時避難しているという連絡がありました。避難所まで私は車で迎えに行ったんですけど、町はもう真っ暗。だから、灯りは車のライトだけでした。もともと田舎ですから夜は暗いんですけど、ただ、信号機も消えて、灯りが全くないんですよ。本当に真っ暗。その中を車を走らせて、避難所へ行って、職員を連れて帰りました。

一方で、三陸鉄道に乗って帰省中の高等部の生徒二人のことが心配でした。三陸鉄道は海沿いを行きますから。どうなってるいかとても心配でしたけど、ようやく夜になって無事だという連絡がありました。ただ、電車の中に4時間閉じ込められて、ようやく消防署の人に救出されたとのことでした。というのは、電車が停まった場所というのがたまたま海から山に上がったところでした。これは本当に偶然ですが運が良かったです。それを聞いた時点で、生徒たちはみんな助かったと思ったんです。

ところが、夜の10時過ぎた頃に、信じられない連絡(メール)が入りました。「高等部3年のK君が行方不明」というメールでした。K君が利用している福祉サービス事業所の所長さんからの

連絡でした。

K君は、私が1年生の時に担任した生徒でした。「訪問教育」というのが支援学校にはあるんです。訪問教育は、障害が極めて重く、学校には来ることができないような子どもの家に先生が訪問して教育をする方法です。K君は、重い自閉症のお子さんで、家が久慈からさらに山奥に入った田野畑村というところに住んでいました。彼は、体は丈夫で元気一杯なのですが、お母さんから離れるとパニックになるんです。昔、山下清という放浪の画家がいましたが、彼の風貌は山下清にそっくりでユーモラスな子でした。けれども、お母さんから離れるとパニックになって、大きな体で「おかあさ〜ん」って泣く子だったんですね。お母さんがつきっきりでないと、学校に来ることはできない、訪問教育としては非常に珍しいケースです。学校から、1時間位ぐらいの山の中に家があって、私は彼の家に一年間通っていました。人間的に非常に魅力がある子で、私は大好きになりすぐに仲良くなって、K君も少しずつ母親から離れて学校に来られるようになりました。そのかわり、私が母親の代わりのようになって、とにかく私にくっついてくるんです。学校に来るといろんなこだわりがあって、自閉症のお子さんなので、例えば校内の電気が切れそうなところをすぐに見つけて「で、で、でんきがペカペカしてる。でんきコウカンしてえ！コウカンしてえ！」と繰り返し言い続けるんです。学校に1週間に2日ぐらい来ることができるようになって、福祉サービスの送迎の車で学校に来ていました。

この生徒が福祉の車で、家に帰る途中で津波に遭って行方不明だという連絡が、福祉サービスの事業所から入りました。にわかに信じがたく「何かの間違いだろう」と思いましたが、とにかくすぐに現場に向かうことになりました。連絡をくれた福祉事業所の所長と、学校からは副校長と私と生徒指導の先生、地元の地理に詳しい職員4名で現場に向かいました。夜の11時くらいでした。ある所から道路は封鎖されていて、警察から「ストップ、ここから先にはいけない。」と止められました。しかたないので山道を迂回して現場を目指しました。普通20分で行けるところでしたが、1時間半かけて、やっと現場に辿りつきました。現場は真っ暗で、車のライトにいろいろなものが少しずつ映し出されるのが本当に恐ろしかったです。

ある川を渡ろうとした時です。橋に何か大きなものが引っかかっているんです。何かな？と思ったら家が一軒傾いて橋に引っかかっていました。どこからか家が流れされてきたわけです。それを見た時には、「これは大変なことになってる」と思いました。

避難所を次々と6カ所ほど廻りました。助け出された人も結構いるという情報もあったのですが、どの避難所にも彼の姿はありませんでした。病院に連絡して「そっちに行っていないか？」と尋ねましたが、そちらにもおらず、結局、安否確認できないまま2時過ぎに、いったん学校に帰ってきました。

翌朝、学校にかけつけたご両親と職員で捜索に行くことになり、男性職員だけ10人くらいで捜索活動に現場に入りました。これがその時の写真（スライド）ですけど、これ見た時にあまりに悲惨な状況で、どうしていいのかわからない状態でした。実は、福祉車両で行方不明になったのがどうしてわかったのかということ…。若い運転手さんとK君と二人は車で海沿いの道路を走っていたそうです。地震の後、道路が大渋滞になったらしいんです。要するに、車で逃げようとした人がいっぱいいたためか、ちょうどその海の近くで車が身動きとれなくなった。そうしているうちに海の向こうから津波が来るのが見えたそうです。若い運転手さんはK君の手を握って車の外に出て逃げたそうです。山を目指して逃げたそうです。少し山側の斜面を登ったところで、その時に津波がもう来てしまって手を握ったまま一緒に流された。本人の話では1km以上も流されたと。手をつないだ

まま、流されて流されて、ようやく波が引いて、二人が立ち上がったら、今度は二番目の波が来て、そこでまた流されて、ついに手が離れてしまったそうです。彼はたまたま木に引っかかっているのを消防士さんに助けてもらって病院に運ばれた。意識がもどって「そうだ、K君がいない。K君がどこかに流された」というので、福祉サービス事業所を通じて学校に連絡が入ったんです。

その話を聞いて、だいたいの現場は想像できました。ちょうどその現場は三陸鉄道の北リアス線が走っていたところですよ。(スライド)ここは線路です。この線路をさっき言った10分前に別の生徒が二人乗って、通過していたんですね。(スライド)これは現場の近くの防潮堤ですが、こんなふうに破壊されていますから。津波っていうのはすごい力です。あとで、私もテレビのニュースで見ましたけれども、家が流されるというのはつまり、防潮堤を津波が超えた後で流されている。でも、直接ぶつかった時にはこんなふうにコンクリートが粉々になるくらいですから、津波の力っていうのはとんでもないです。(スライド)ここは松林です。ここはもともと海が見えなかったんです。何千本もの松の林があって、防潮堤があって、海はまったく見えませんでした。それが、松林が全部なぎ倒されて、防潮堤も破壊されて、すっかり海が見えるようになってしまったわけです。

私たちが現場に到着した時に、自衛隊の人たちたくさん来ていました。阪神淡路大震災の時は自衛隊の出動が遅れたという話を聞いていました。自衛隊を出動させるのにも手続きがいろいろ必要で、それを反省してすぐに自衛隊出動命令を出せるように改善されたということで、今回はすぐに自衛隊が駆けつけて、(スライド)現場にも自衛隊がこういう感じで歩いていました。

さっきも言いましたが、津波というのは、山にぶつかって終わりじゃないんです。上っていくんです。それを『遡上』っていうんですけど、30m以上かけ上る。(スライド)これは山ですよ。山の上まで津波が上って木をなぎ倒した跡です。さっきの石、石碑のあったところ、姉吉というところ、ここは40m波が駆け上がった。40mといたらすごい高さです。そこまで津波が上がっていったんです。

現場には、お父さんとお母さんが心配で来られていました。お母さんには帰ってもらい、お父さんと私たち職員でK君の捜索をしました。でも、捜索をしている間も何度も大きな余震があり、サイレンが鳴ります。その度逃げて、おさまったら探すという繰り返しでした。4日間探し続けて、見つからず「もう、見つけるのが難しい」と思い始めた時、3月14日でした。午後2時すぎに自衛隊の隊員の叫ぶ声が聞こえました。K君が亡くなった姿で見つかりました。その時には遺体の確認とか私もしましたが、遺体はほとんど傷ついてなかったです。ちょうど、重機の窪みのところに挟まっていた。表情も穏やかでした。額にちょっとすり傷があるくらいでした。男の先生たち10人ぐらいで探していたんですが、その時はK君の遺体を囲んで全員号泣しました。その時、お父さんが「うちの息子は幸せだ」って言われました。「うちの息子は、ここで先生たちに見つけてもらえたから、本当に幸せです」と言ってくれたんです。

今日も神戸の防災センターで被災者のメッセージを見ましたけど、「一人ひとりの、それぞれの震災の日がある」と。だから、100人いたら100とおおり、1000人いたら1000とおりの体験があるわけです。私もK君の他に、この震災で知り合いを何人か、なくしました。

その中で、あるろう夫婦のことを話します。震災が3月11日だったんですけど、その5日前の3月6日に大槌町という、沿岸にある町で耳の日集会が行われ、地元の町長さんとか、県内の関係者が集まりました。私も参加しました。そこにそのろう夫婦も参加していました。お二人は沿岸に住んでいました。そのご夫婦には教員を目指している自慢の息子さんがおられて、私はたまたま彼

が臨時講師をしているとき、ろう学校で一緒に働いていました。なので、会うたびに特に奥さんの方は「うちの息子元気か?」「うちの息子はろう学校の教員になれるだろうか?教員試験はむずかしいか?」と聞かれるんです。私は「彼は一生懸命勉強しているから大丈夫だ」と答えていました。その後、彼は教員試験に合格して支援学校の先生になっていました。勤務地は支援学校で、ろう学校ではありませんでしたが。

耳の日集会終わって帰ろうとしたら、彼のお母さんは集会の実行委員だったので、見送りにいて久しぶりに会いました。「うちの息子やっとな合格した」～「よかった、よかった」～「次はろう学校に行ってほしいんだ」～「わかっている。ろう学校を希望していれば、いつか必ずろう学校に異動できるから」…そんな会話をしました。「今、ちょっと通勤がたいへん。遠距離の通勤だから」と息子さんの健康を気遣ってもしました。それが、彼のお母さんと話した最後でした。この日は旦那さんが地元でろう運動を長年頑張ったということで表彰を受けて、ご夫婦にとって輝いていた記念の日だったんです。その5日後に、2人とも津波の犠牲になりました。

亡くなった年の5月にご夫婦のお別れ会をしました。その時に息子さんに会って「実は耳の日の時にお母さんに会って最後まで君のことをすごく心配していて、いつかはろう学校の先生になって欲しいって言われていたよ。」って話しました。実は震災の年の4月に人事異動があって、彼はろう学校の教員になっていたんです。もうちょっと時間があればろう学校の教員になるのを見届けることができたんだけど。だから、3月6日っていうと、もしかすると校内に内示というのがあって、もしかすると彼はろう学校に行くよって言われていたかもしれない。けどお母さんにはまだ言ってなかったんでしょうね。せめて知っていたら本当に嬉しかったんじゃないかなって後で思いました。

このご夫婦、亡くなられた場所が防災センターでした。防災センターっていろんな場所にあるんですね。今回、非常に問題になったのは、防災センターに逃げて犠牲になった人がたくさんいたということです。防災センターは、決して避難所ではないと言ってるようですが、避難訓練のときにはみんな防災センターに集まることが結構多い。このろう夫婦も防災センターまで逃げて、地域の仲間に「今、防災センターに逃げたから大丈夫」とメールしていたそうです。ところがその防災センターが津波にのまれて、このろう夫婦の他に100人以上の方がここで亡くなりました。

ここが耳の日集会が行われた大槌町の役場です(スライド)。大槌町の町長さんも役場にて津波で亡くなりました。それから、宮城、福島では通研の会員さんで亡くなった方はいなかったんですけど、実は岩手では二人の通研の会員が亡くなりました。二人ともすごく一生懸命やっていた方で、一人は地元のろうあ者の相談員、つまり設置通訳者でした。もう一人の方は地元のサークルで一生懸命やっていた方でした。このお二人が行方不明になったと知って、どこかで見つかりますようにと祈ってましたが、一人の方は遺体で見つかり、もう一人の方は今も行方不明のままです。

これが(スライド)震災の前の年に「三陸鉄道の旅」というのを通研の地域班で企画して交流した時の写真です。ここに、たまたま今話したろう夫婦と二人の通研会員の4人も写っていて、この写真はうちで作った「灯はともり続ける」の一番最後のページに載せています。

さっき話しましたろうあ者のご夫婦の息子さんですが、今、ろう学校で働いてるんですけど、結婚しまして、結婚相手とはろう学校で知り合い、そのお相手の女性は、いま私と一緒に働いています。通研の会員でもあります。今は二人共ろう教育に携わり、活躍しています。

(休憩)

今、休憩中に会場の方から話かけていただきました。岩手の盛岡市から兵庫に嫁がれ、今娘さん

が盛岡の大学に在学中で、私の実家の近所にいらっしゃるみたいです。本当にうれしいなと思いました。さっき、写ってた震災の写真の大槌町の現場で、やはりお友だちが亡くなられたそうです。すごく縁を感じます。私も神戸に来るのが決まってから、兵庫とか、神戸という言葉を聞くと感じるものがあって。私の職場にも、実は神戸出身の先生がいて、私のすぐ前の席にいますけど、女の先生で。帰ったらいろいろお話したいなあと思っています。

ここからは、岩手の取り組みを紹介していきたいと思います。岩手では、ここにある「灯はともり続ける」という、こういう冊子を作成いたしました。このタイトルはさっきも言いましたが、神戸からいただいた阪神淡路大震災の「希望の灯」、その灯りをタイトルにいただきました。これは本部の助成を受けて作成したものです。NHK手話ニュースでも紹介されました。表紙をめくると、すぐ神戸からいただいた灯りの写真があります。きょう、見てきた灯りの写真です。岩手県では2か所、この灯りをいただいて、丘の上にこの灯りを灯しています。

冊子の中身ですが、なかなか作るのにもつらいものがありました。震災から1年ぐらいして作り始めましたが、震災のことをなかなか話せないという人もいて、聞き出すのもつらいものがありました。でも、何か残しておかなきゃダメだということで、みんなから、会員からいろいろな資料をいただきました。

これはその中にある1枚の写真です。宮古の田老という地域がありまして、ここは「防災の町」といわれていたところで、明治と、昭和の三陸津波の時に、ものすごい被害を受けた地域です。その教訓をもとに、ここに大きな防潮堤を作ったんです。しかも防潮堤が二重になっていて、さらに海側にもう一本防潮堤があるというすごい防潮堤を作ったんです。日本一の防潮堤だというふうに言われ、この防潮堤を見学に、たくさんの方が訪れていた所です。津波警報が出た時に、最初3mという警報だったと言ったでしょ。この防潮堤は10mくらいの高さがあるんです。だから、3mだったら大丈夫かなって思う人もいるわけです。ところが、実際に来た津波は3mどころじゃなかった。この防潮堤は、壊れはしなかったんですけど、津波がこれを乗り越えました。どうなったかという、最後はこんなふう（スライド）、これは瓦礫の山を片づけた後ですけど、津波が乗り越えて、建物全部をのみ込んで、何もなくなりました。3mなら、この二重の防潮堤が防ぐから大丈夫と思ったのか、逃げなかった人が結構いて、被害が大きくなりました。

各地域のアンケート、書きにくいこともあるから、思ったことをまず書いてもらいました。そこに出たことをいくつか紹介します。

「通信・交通がマヒして安否確認は直接会いに行くしかないと痛感した」とあります。まさにその通りですよ。最後は、直接家に会いに行くしかない。「電気や水、電話が止まって、もう江戸時代に戻ってしまった」これも、本当にそういう状況。逆に、いかに私たちが便利な生活に慣れているかっていうこともあります。「避難所のろうあ者に筆談、ポスター掲示の配慮が必要だ」あとで避難所のことを言ってるろうあ者の話をしますが、今回、聴覚障害者の方も家を流されたり、避難所生活をした方がおられますが、ろうあの人、意外とたくましく生きてる人が多いんです。私も一ヵ月ぶりくらいに会った時に、「震災の時にどうやって暮らしてた？」と聞くと、「大丈夫」って言うろうあ者の方がいて、「大丈夫ってことないでしょ、店も閉まって、水も出なくて、どうやって生活していたの？」と聞くと、「家のドアに“どこどこに給水車来るから、どこどこ小学校に集まって”と書いてあった。隣りの人が書いてくれた。」と言われるんです。「すごい親切だね」と言うと、「付き合ってるから、隣りの人と仲いいから大丈夫」と。「食べ物とかスーパーになくなっちゃ

たけど大丈夫なの？」と聞いたら、「お腹すいたからスーパーに行ったら、長蛇の列になっていてびっくりした。手を振ってる人がいて、手話サークルの友達だったから“何欲しい？”と言われて、代わりに買ってもらった」等々。そうやって、地域で繋がって、しっかり生きていろうあ者もおられます。

案外大変だったのが難聴の人たち。難聴協会の理事長の高岡さんが岩手に来て沿岸の人たち呼んで座談会をやり、難聴の人たちが苦勞したっていう話が出ました。私もパソコン要約筆記をするまでは、難聴の人たちは、話もできるし、そんなに困ること少ないんじゃないかって思っていました。ところが逆に、話が上手なために誤解される。「話しできるからわかるでしょ。」って思われてしまう。例えば、避難所でも、いろんな情報が聞こえないから「ちょっと書いてください」っていうと「さっきからしゃべってるからわかるだろ」と言われてしまったり、ろうあ者の人だと本当に聞こえない、手話で表現したりすると「あつ、聞こえないんだな」ってわかってくれて指さししてくれたりするんですけど、難聴の人たちっていうのは普通の人と同じにみられてしまう。誤解されることが多くて、すごく苦しい思いをしたという人がいます。いくら説明してもわかってもらえなかったとか、難聴の人っていうのはそういう意味で、ろうあ者の方が手話でアピールするようなことができなくて、聞こえる人と同じにみられる分、苦勞が多いわけです。

それからアンケートの中に「安否確認はすぐには無理。まず家族や親しい人が気がかり」とあります。これも当たり前ですよ。もちろん手話サークルの仲間は どうしてるかとか、通研の仲間は、というのは気になりますけど、まず自分の家族ですよ。自分の家族がどうなってるか、ましてや離ればなれで生活していたら、それが最優先なわけですよ。だから、結局、今回は沿岸の人たちみんな被災していますから、通訳者の人たちも被災しているんです。そしたら、家族のことも心配だけど、ろうあ者の対応もしなければならず、大変だったんです。

あとから応援の通訳者が駆けつけるまで、一人でもものすごく苦勞したっていうのを聞きました。その中で、自分の家族のことも心配しなきゃならない。そこがなんていうか、気持ちが追い詰められ、余裕がないですから、たまにそういうのを批判する人もいるわけです。通訳者、なんであの時来てくれなかったとか、言うんですけど、みんな被災してますから。

一番怖いのはそういうところだと思います。気持ちが追い詰められた時、人間やっぱり余裕がなくなって、いろんな批判をしてしまったりとか、あるわけです。

考察の部分のページです。まずは、「生きるためには主体的な行動が必要」、「自分の命は自分で守るのが鉄則」と。今日も神戸の防災センターに行ったら、そこでボランティアで説明してくれるおじさんがいて、「まず、自分の命は自分で守るんだよ」と説明してましたけど、さっきの「津波でんでこ」というのもまさにこのことで、まずは自分の命は自分で守ること。

それから「地域の繋がりを作ること」。「地域に聴覚障害者の理解者を増やすこと」。これは繰り返し何回も出てきますけど、別に聴覚障害者に限ったことじゃなく、誰でもそうです。近所付き合いしている人はやっぱり助けられますけど、そういう繋がりがない人は聞こえるとか、聞こえないとか関係なく苦勞するわけですよ。近所とか地域と繋がってる、その繋がりが多ければ多いほどお互いに助け合える。

「安否確認は簡潔に」。これはさっきメールがいっぱいきたと言いましたが、ずっとメールがくるわけです。「大丈夫ですか？」ときて、「大丈夫」って返事すると、「どこにいるんですか？」とまたきて、「今、ここにいて大丈夫だからあとで。」とか言うとか「けがはないですか」とか。そういうメールがいっぱい、何回もきて、それに一つ一つ答えるというのが大変なんです。こっちも焦っ

てたりする状況ですので、訊くときには「元気か？ケガはないか？どこにいるか？」とピッと訊いて、答えるときも「元気。ケガなし。久慈にいる。」と答える。そういうのがすごく大事です。メールのやり取りだけで、時間がとられてしまいます。ましてや返事しないと、「どうなってんだ」と心配されますから。メールでも安否確認のやり取りの工夫が必要です。

「聴覚障害者が使いやすい機能を盛り込んだインターネット機器の開発が必要」。これは、聞こえる人はラジオを手掛かりにしますが、聞こえない人たちは携帯とか、スマホとかです。スマホも便利になってきましたが、情報を取得しやすい手段、ここはどんどん開発が進むと思います。

それから、「すべての市町村に複数の手話通訳者が必要」。岩手県は設置の通訳者が、大きい市や県の出先機関、約20か所ぐらいにいます。広いので20か所でも足りないですし、通訳者はだいたい一人ずつです。そうすると、さっき言ったみたいな時に一人だとまず役場にはいなきゃならないし、かといってあそこに心配な聞こえない人がいるといった時に駆けつけることができないし、やはり複数必要となります。

それから、岩手の場合は、自治体の設置通訳者は、すべて非正規雇用です。兵庫もそうだとこの話を聞きましたけど、やっぱり非正規雇用の方は、いざ支援といった時に自分の身分を気にするというか、「あなたは誰ですか？」と言われて、「手話通訳で来てます」といった時に「どういう身分ですか？」と訊かれます。例えばうちの学校だったら、非常勤で来ている先生は震災の時には「家に帰っていいよ。」っていうふうに言われます。そういう不安定な身分の人が第一線にいて働かなきゃいけないという現状です。やはり、正規雇用を進めなければと思います。

阪神淡路大震災の時もそうだと思いますけど、今回、中央本部で全通研がコーディネートして、手話通訳者の被災地派遣をしたっていうこと、これはすごく大きかったと思います。ただ、岩手県は通訳者の派遣の受け入れゼロだったんです。県内で全部やったんですけど、これは、どうだったのかなということは今、反省しなきゃならない。宮城県が一番通訳者を受け入れて、確かに宮城は設置通訳者が少なかったというのもあって、こちらから行った方もおられるんじゃないかなと思いますけど、宮城にたくさん通訳者がかけつけてくれたということがありました。

その後、今度は通訳者への心のケア。これがすごく大事です。さっき言ったようにとても辛い思いをしてる通訳者がたくさんいます。その通訳者たちの心のケアをなんとかしなきゃならない。そして、これも何回も言うことですが、震災後に集まる、まず集まって顔と顔を合わせる。メールのやり取りや電話よりも、実際に会って顔と顔をあわせてホッとさせる。そして、話をするというのが大事で、そういう企画を今も岩手は続けています。本当に会うということの大切さというか、今、メール社会じゃないですか、パソコンで、インターネットでやり取りしてますけど、やっぱり人と人が実際に会って、話をするということがいかに大事かっていうのをつくづく感じました。

「全通研の力」って書きましたけど、今回ほんとに全国から全通研だけじゃない、ろう協、ろう連の力。中央本部に義援金や支援が寄せられました。1,356件、7,000万円以上の義援金が集まりました。それだけではないんです。さっきの通訳者のほかにも、バスツアー組んで支援に来てくれた通研の人たちもいますし、個人的に来てくれた人たちもいます。ろうあ者の人たちも通研の人たちと一緒に来てくれました。支援のために、たくさんの人たちが来てくれました。今日もさっき、話したのですが、通訳者の方の息子さんも年に何回かボランティアに被災地に行ってるという話もありました。本当にたくさんの人たちが支援に来てくれたと思います。

公的という意味では、厚労省が手話通訳派遣コーディネートを「東日本大震災聴覚障害者救援中央本部」に事業を委託して、通訳者が被災地に駆けつけた。本当にこれは大きかったです。岩手は

さっき言いましたように、沿岸と内陸とに分れてて、内陸の方は復旧が早かったわけです。なので、内陸にいる通訳者が沿岸に行きました。その時にここは良かったことだと思うんですけど、通訳者一人で行くのではなく、保健師さんと障害者の相談員の方と5人ぐらいのチームを作って行きました。5人で行くことで相談しながら活動できたということで、これは良かったのかなど。沿岸の3カ所ぐらいに拠点を作って交替で通訳者と保健師さんとかを派遣して支援に行きました。

それから、全通研には会費の免除を三年間してもらいました。実は、岩手の会員数というのは震災の後、過去最高の数を記録して、一番会員数が増えたんです。やっぱり、本部からの支援、全国からの支援を、本当にみんなひしひしと感じたんですね。特に、被災地の人たちで辞める人が、ほとんどいなかったんです。みんな、通研と繋がっているという気持ちを感じて会員を続けた。実は岩手では、震災後に被災地の会員数が増えました。

それから、通訳者の心のケアが必要だと言いましたけど、全通研の支援を受けて健康相談を実施したんです。全通研では、皆さん知ってると思いますけど、埜田先生と健康対策部の森川さん、お二人に東北3県を廻っていただきました。岩手でも、この2年間で3回健康相談を実施して、延べ29人が健康相談を受けました。本当に、これは貴重でした。通訳者の人たちは、いろんな形で心の傷を負ってます。

カウンセラーさんは、たくさん派遣されたんですけど、手話通訳は特別な仕事なので、仕事の中身をわかってもらうのがなかなか大変なわけです。でも、埜田先生と森川さんであればそれがすぐわかってもらえるので、本当にこの二人に29人の人たちは救われたというか、はじめて自分の心のうちを吐き出すことができたと思います。そして、少し元気を取り戻すことができました。この健康相談は継続したいと思っています。

埜田先生の報告からですけど、手話通訳者は自分自身も被災してるんですよ。それなのに手話通訳者として必死に活動してるという姿に心が痛んだそうです。充分活動ができなかったって思ってる人がいっぱいいるとのこと。通訳者間で、時間をかけてつらいこと、悲しいこと、不安なこと、腹立たしい事、そんなことを出し合うことが大事だとのことでした。心の傷ってというのは単に悲しいことだけじゃなくて、やっぱり何か言われたこと、さっきも言ったように例えば「あの時に、あなたがいてくれれば、よかったのに、どうしていなかったの」という、その一言がものすごい傷になっている通訳者もいるわけです。でも、ああいう状況の中ではそういうことを言う方も責められないと思います。それから、例えばぼーっとして何もできないという人もいます。ぼーっとするのは心が休んでほしいと要求していると埜田先生はおっしゃっていました。話すことで自分の心の荷物を少なくすることができる。人の話を受け入れる余裕になる。自分が聞くだけじゃなくて話すこと。話すことによって自分に余裕ができる。そのようなことを埜田先生が話してくれました。

全通研の研究誌、最初が119号、震災の次の年でしたけれども、これに被災地の特集が載りました。今年の春、ついこないだの127号にその後の状況が載っております。これからということで「さまざまな温度差の中で」と書きましたけども、被災3県の避難者が未だに24万人くらいいるんです。後でお見せしますが今、被災地の瓦礫は、ほとんど撤去されました。撤去されたんですけど、そこは何もなくなりました。何も無い。何もなくなっちゃった。そこに今、盛り土をして少しでも土台を高くしてそこにまた街を作ろうとしているんですけど、どれだけ時間がかかるかわからない。この数字（スライド）は、避難所生活をしている人の数。やっぱり一番気になるのが福島ですね。福島がこれだけ多いのは原発の事故のためですね。もう住めない、戻れないという状況の人がいます。原発事故の影響は本当に大きいです。

さっきも言いましたが、私の娘が福島で働いていたので、私も親ですから「もう、岩手に帰ってきたら」と言いました。娘は老人施設で作業療法士をしています、「お父さん、帰れるわけないでしょ」と逆に説教されました。福島のある通研の会員の人が言っていました。「今の福島の状況は白でも黒でもない。曇り空のようなグレーだと」。放射能は目に見えない。そういう目に見えないものと戦わなければならぬ。津波の直接の被害は福島は少なかったのに、原発の事故があったため、特に県外にこんなに（スライド）たくさんの方が避難をしている状況なんですね。これは震災による死者、行方不明者ですけど、宮城は1万人を超えています。岩手が5千人を超えています。福島は1,800人超ですが、震災関連死っていうのがあります。震災の後に、震災が原因で二次的に亡くなった方々、これは、福島では1,700人を超えています。津波で直接的に亡くなった方と同じくらいの数です。年齢は65歳以上の方がかなり多いです。だから、津波の後にいろいろと悲観したりして、亡くなれた方、そういう人が福島が一番多いですね。

今は、先ほど言いましたように、仮設住宅から災害公営住宅とあって、神戸にもあると思いますけど、被災者のための団地が建てられて、引っ越しをしている人もいます。地域によって進み具合はまちまちですが、まだ建設は進んでいません。そして地域には、被災した人、被災しなかった人もいます。ある人は、津波が家のすぐ近くまで来たけど、家は大丈夫という人もいます。でも自分の家のすぐ前の家は流されているということがあり、自分の家が残った人も悩んでいます。家を再建できる人もいるし、建てられない人もいます。いろいろな気持ちの温度差が出てきています。

被災地でも手話サークルが再開して、通研の研修会とか、地域班のこういう行事、沿岸の方でもやるようにしているんですけど、それもまた、参加する余裕のない人がいます。参加できなくても、会員でいるだけでも繋がりという意味では意味があると思います。たまに余裕がある時に参加してくれればいい。大きいのは全通研のバックアップです。いろいろな意味で、本部からバックアップしてもらっています。通研活動やろうあ協会の活動が、以前の活動のスタイルを取り戻しつつあるんですけど、今度、通常の活動の忙しさがありませんから、じゃあ、被災地への対応とか、防災対策はどうするんだっていうことで、ゆっくり進めようってことで話をしています。

岩手は、もともと聴覚障がい者の関係団体の結束は、そんなに強くなかったんです。震災後、ろうあ協会、中失協会、難聴協会、こういう関係団体が連携できたというのは、すごく大きいことです。私が今、聴覚の支援の学校にいて思うのは、今、子どもたちは、それこそ人工内耳をつけている子どもも増えて、通常学校から転校してくる子、通常学校に行って戻ってくる子、重複障害のお子さんもいます。育った経緯も障がいの状態もさまざまです。ですから、社会においてもっと関係団体が力を合わせる必要を感じています。例えば、難聴者とろうあ者の違いは何でしょう？昔はろう学校にいればろうあ者で、ろう学校じゃない所にいれば難聴者で、という漠然とした分け方があったかもしれませんが。しかし、今はそんな隔たりもないです。難聴者も手話も勉強しているし、ろうあ者にも文字の保障が必要です。そういう境目っていうのは本当はないわけです。ですからもっと、関係団体が連携していかなければと思います。そういうことも、防災に繋がるのではないかと思います。その中心になるのが情報だと思えるんですね。情報提供施設というのは、すごく大事な存在だと思います。

さて、先週、さっきのK君が亡くなった場所に行くと、K君の家にも行ってご家族に会ってきました。その時に現場近くの写真を撮りました。（スライド）松林のところですよ。今は、三陸鉄道が復旧して、このように車両が走っていました。今の三陸鉄道です。こんなふうに防潮堤も今、前よりかなり高く作ったり、土地のかさ上げをしたりしています。山を削って、山から土を運んでかさ

上げ工事をしています。ここの上にいろんな建物を建てていくんだと思います。

これ（スライド）が岩手の情報提供施設のあるアイーナ。アイーナは、岩手県の建物ですけど、その4階に聴覚障がい者情報センターがあります。この建物は立派な建物です。今日、見学した防災未来センターと同じような感じの、透明なガラス張りの建物で、この4階に情報センターがあります。ここは、停電になっても自家発電ができるので、そういう意味では大丈夫です。電気も止まらない。これは（スライド）、震災直後のアイーナ。ここに情報センターがあるのですが、逃げた人たちがここで寝泊りしました。アイーナは、駅のすぐ近くにあり、駅の周りにはホテルもいっぱいあります。この時はホテルが毛布を無料で貸し出してくれました。ホテルから毛布が次々運ばれて、新幹線に乗ることができなくなった人など、ここで夜を明かした人がいっぱいいます。もちろん、情報センターには聞こえない人もたくさん駆けつけたし、通訳の人たちとか、手話サークルの人も駆けつけて、何日間かここでボランティアで働いたわけです。やっぱり情報センターっていうのが一番拠点になる大事な施設だと改めて感じました。集うこと、集う場所が大事だっていうことを思いました。

これは（スライド）、震災後11月に、内陸の盛岡の温泉に沿岸からたくさん集まって、みんなでドンチャン騒ぎをした時の写真です。これは女装して踊っている人ですけど、内陸の人が沿岸の人たちを笑わせようと思ってやりました。この時、沿岸の人が本当に久しぶりに笑ったと言っていました。6か月以上過ぎた後でしたけど、本部から伊藤事務局長さんや事務所長の浅井さんも駆けつけてくれました。本当に有難かったです。これは（スライド）研究誌の取材で、研究誌部の長谷川さんと若杉さんのお二人が、レンタカー借りて沿岸周って、三日間ぐらいかけて取材した時の写真です。その取材をきっかけにして、被災地の人たちが久しぶりに集まりました。そういうことがないと、なかなか話せない、そういう想いを語ったことがこの研究誌に載っています。ぜひ見ていただければと思います。

最後になりましたけど、前支部長の我妻さん、通研の代表ということで、つらい思いもしたんですね。記録集「灯はともり続ける」に書いていますが、みんなが被災者になる可能性があり、すぐ行動したくても行動できない状況もあります。あと、やっぱり普段からの地域との繋がりが大事だと書いています。「この日起きたことを忘れずに」は、我妻さんからの切実なメッセージです。それから、これもこの記録集に載っていますが「手話この魅力あることば」で被災地の宮古市の皆川さんというろうあ者が、その時の様子を語っています。この顔（スライド）は、津波を見ている表情です。やっぱりこういう時に手話ってすごいなって思うんです。我々が口でしゃべるよりも、ろうあ者の手話、表情も含めた表現を見ていたら、そこに津波の情景が見えてくるんです。これは、手話の上手、下手関係なく、この人の表現を見てたら伝わってきます。宮城のろう者の渡邊さんもそうでしたけど、私は、この二人の話を直に見ましたが、本当にろうあ者の人の手話表現っていうのは凄いです。是非、このDVDを見て欲しいと思います。とても貴重なDVDだと思います。この中で、皆川さんが言っています「手話通訳を増やすのはもちろん大事だ。でも、いつも近くにいるわけじゃない。自分の町に手話が少し通じる人、聞こえない人の理解者がいることが災害の時にすごく大事だ」と。彼が避難所に行った時、やっぱりそういうサークルの人に助けられたと言っています。例えば、避難所で食糧が配られるので、すぐに並んだそうです。そしたら、ポンポンと肩を叩かれて、紙に書いて「子どもが先だよ」と教えてもらって、見たら子どもばかり並んでいた。自分はそれがわからず、「はやく」と思って行ったけど、サークルの人がそれを教えてくれたそうです。その他にもいろんな所で、サークルの人や地域の手話講習会で勉強した人がいて、その人たち

に助けられたという話をされています。

『あまちゃん』(スライド)。「じえ、じえ、じえ」ということで、「東北さ来てけろ！」と。岩手は、ほんとに『あまちゃん』に元気をもらいました。能年さんは兵庫の人。「あまちゃん」の岩手への経済効果は33億円だったそうです。今、沿岸の久慈市には観光客がものすごいです。昔は、観光客なんてほとんど来ない所でしたから。

最後の最後になりますが、今度の福島集会、ぜひ参加してほしいです。ということで、私の話、終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)